

1 総 括

(1) 教育目標（学校経営案より）

学習指導要領の基本理念をふまえ、児童のすぐれた個性を伸ばし、個を生かす教育活動を通して、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図る。

<めざす児童像>

- | | |
|-------|-----------------------|
| ○ 強 く | 自他の生命を大切にし、たくましく生き抜く子 |
| ○ 正しく | 自ら学び、正しく判断できる子 |
| ○ 明るく | 礼儀正しく、心豊かで思いやりの心をもった子 |

(2) 本年度の重点努力目標

ア 確かな学力の育成に向けて

- ・体験的な学習、問題解決的な学習を重視するとともに、ICT 機器の活用方法を工夫し、児童が自ら課題をもって主体的に学習を進め、他者との関わり合いにより、得た意見を基に自分の考えを含め、表現することができるよう授業の充実を図る。
- ・教師が指導の改善を図るとともに、児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるような学習評価を工夫する。

イ 豊かな心の育成に向けて

- ・「考え、議論する道徳」に向けた道徳科の授業の充実を図る。
- ・異年齢集団「なかま」活動により、思いやりの心や感謝の心の育成を図る。
- ・教育活動全体を通して児童の道徳性を深め、心のつながりを大切にされた学級・学校づくりを図る。

ウ 健康・安全教育の充実に向けて

- ・体育的行事を計画的に実施するとともに、心身の健康課題に対する指導に取り組み、家庭の協力を得ながら、児童の基本的な生活習慣の育成に努める。
- ・定期的な安全点検以外にも、遊具の安全な使用方法や廊下歩行の安全指導など、児童が安心して生活できる学校環境づくりに努める。また、避難訓練を随時行い、災害時に身を守るための適切な行動ができるように指導する。

エ 家庭・地域との連携

- ・学校運営協議会の場や、学校 HP、学校通信等を通して、家庭や地域に本校の教育活動について積極的に発信する。
- ・読み聞かせボランティア「メルポケ」と連携し、「読書の時間」の充実を図るなど、地域の人的・物的資源を積極的に活用し、教育活動のさらなる充実を図る。

2 自己評価の実施体制

- (1) 調査時期 令和4年12月12日～12月19日
- (2) 調査項目 別紙アンケート参照
- (3) 調査対象 有効回答者数/対象者数

・児童	156名/全156名		
・保護者	122名/全122名	・教職員	17名/17名
		計295名	

3 調査結果[資料として添付]

別紙アンケート結果参照

4 考 察【児童・保護者・教職員の総括的考察】

(1) 児童の評価

- ・ 全体的に、昨年度とあまり変化はなく肯定的な意見が多い。学校生活において満足している児童が多い。
- ・ 児童においては、昨年度同様「本を読むことが好きである」の質問に対して、3～4割の児童の評価が低い傾向にある。日課の中で、朝の読書の時間が減ったことで、読書量が減り、読書離れが進んでしまったと考えられる。

(2) 保護者の評価

- ・ 質問に対して肯定的な意見が多く、子どもが学校生活に満足していると感じている保護者が多いことが伺える。
- ・ 「子どもの学習や生活について、担任や他の教職員に相談できる」「わが子は大切にされ、認められている」の質問に対して、昨年度より肯定的な評価が共に13パー

セント上昇し、「教職員は、子どもが成長できるよう工夫して教育にあたっているの達成状況も7パーセント上がり、格段に良い結果をいただくことができた。

- ・ 「わが子は、自分からあいさつをよくする」の質問に対して、全項目中で、達成状況が一番低い。コロナ渦での影響も考えられるが、挨拶の大切さにつなげる指導ができていなかったことが感じられる。
- ・ 「今年の学校目標を知っている」が昨年より低くなり、「学年通信や各種たより、HP等で、学校の様子がおおむねわかる」の質問に対して、肯定的な意見がずいぶん少なくなってしまった。これは、HPアップの回数が昨年度より随分減ってしまったことが原因だと思われる。

(3) 教職員の評価

- ・ 昨年度に比べ、全体的に肯定的な意見が減少した。児童・保護者共に、肯定的な意見が多く、学校生活に満足していると感じているにも関わらず、このような結果であるということから、教職員は現状に満足することなく、更に高みを目指していることがわかる。志の高い教師集団であると考ええる。

5 成果と課題

《成果》

- (1) 昨年度のアンケート結果から、人間関係に不安を抱え、心に悩みをもっている子が増えてきているということがわかった。そのため、日頃から、保護者と連携して、子どもたちの心の変化を見逃さないようにし、児童に声掛けをしつつ、より良い関係づくりに努めてきた。その結果、保護者に「教職員に相談できる」「わが子は大切にされ、認められている」と実感していただけるようになった。今後も、学校と家庭が力を合わせ、子どもたちのより良い成長のために努力していく必要があると考える。
- (2) 保護者アンケート「教職員は、子どもが成長できるよう工夫して教育にあたっている」の評価が上がっている。心の教育、キャリア教育、造形教育等において、外部講師を招き、授業を行っていただいたり、指導方法を教えていただいたりしてきた。そして、教師も指導方法を改善しながら授業実践や生徒指導を繰り返してきた成果と考える。

《課題》

- (1) 児童アンケート「学校は楽しい」の質問に対して、肯定的な評価が81パーセントに減少してしまったことを重く受け止める必要がある。登校しぶりをしている児童、保健室登校を必要としている児童等、全職員で共通理解をしつつより良い方法で対応し、すべての児童が「学校は楽しい」と答えられるような学校をめざしていくことが大切である。
- (2) 「自分からあいさつができる」の項目における達成状況について、教師は35パーセント、保護者は66パーセントであるのに対し、児童は85パーセントがA(できた)と回答しており、認識のずれが生じている。「あいさつができる」ということへの捉えが異なっているように思われる。今後、あいさつの大切さを子どもたちに更に強く伝えていき、取り組みについて教職員全体で検討していくことが必要である。
- (3) 読書離れが進んでいることがわかった。朝の読書の時間の確実な確保をしたり、読み着かえボランティア「メルポケ」の方や、教師、子どもたちによる読み聞かせの機会を増やしたりするなどして、本が好きな子どもが育つよう改善していかなくてはならないと考える。

6 改善策

- (1) 児童個々の悩みや問題については、毎週金曜日の全教職員で行う情報共有の機会を継続していく。一人一人の気持ちに寄り添い、子どもの悩みを早期に発見できるように努める。さらに、場合によっては、外部機関との連携も行う。
- (2) 学校からの情報のアウトプットが不十分であることがアンケート結果からわかる。学校だより、学年通信、HPによる家庭や地域への情報発信を組織化して、よりニーズにこたえられるようにしていきたい。
- (3) 温かい言葉のキャッチボールが自然にできるような取り組みを継続して行っていく、それらを通して基本的な生活習慣や心のつながりが身に付くよう支援していきたい。
- (4) 児童に寄り添った指導を行うようにしてきたがゆえに、「教師に相談できる」「わが子は大切にされ認められている」と実感している保護者がとても増えた。逆に、あいさつについての指導は行き届いていないという結果が表れていることからわかるように、はじめのある、めりはりのついた教育に尽力していく必要を強く感じる。